

人名の入った歌（重層性を生む修辭の魅力）

鈴木千登世

例えば『源氏物語』に多用された修辭法に「引歌」と呼ばれるものがある。有名な古歌を自分の文章に引き、それをふまえて表現するもので、記述された事柄と古歌を背景にした美的連想が重層的で複雑な情趣を醸し出す働きがある。三十一音の短歌では一首の世界を重層化する修辭法は有用性が高い。和歌では「歌枕」や「本歌取り」が知られるが、近現代の短歌では「人名の入った短歌」がそれに該当すると考えられる。

ところで、「歌枕」の地名も「人名」もともに固有名詞である。「歌枕」は歌に詠まれた地名が、特定の景物や印象を連想させるものを言う。本来場所を示す記号の「地名」は、特定の景物や印象と結びつけられ（＝歌枕）、さらに形成されたイメージとの重層性を利用して一首の世界を深化、複雑化する働きを持つようになっていった。

これに対して「人名」には最初からその人物の社会的な情報―経歴や業績、作品、逸話など―による既存のイメージ（以下これを仮に「物語」と呼ぶ）が存在する。

違いを念頭に置きながら歌枕を参考にして、近現代の作品を見ていくと、多種多様な歌の中に

- ① 特定の人物をテーマにした作品
- ② 人名とその人物の持つ「物語」の具体的な語句を結びつけて詠まれた作品

③ 「物語」を内包する人名として単独で用いられた作品があることに気がついた。

未知の人名に「物語」は読み取れない。また、読者の持つ情報の量と質によって読みが変化するのも人名の入った短歌の特徴と言える。そこで①～③の視点で分類した歌について、表現された内容と、詠まれた人名に由来する「物語」を重ねることを通して、人名の入った短歌の特質について考察してみたい。

① テーマとしての人名

樋口一葉 またの名を夏まつすぐに草矢飛ぶ

ごと金借りにゆく 川野 里子 『太陽の壺』

花終へし藤棚の下に坐りゐる髭鬚の老いび

と柘二ならずや 桑原正紀 『時のほとり』

息子と帰つてくる子は日和春帆ちやん風景

のやうな名前の少女 米川千嘉子 『滝と流星』

場所を示す記号としての地名のように、イメージではなく

特定の個人をテーマとして描いた作品。

一首目は、借金に頼る暮らしの樋口家の、家計を支える夏のけなげさが「草矢飛ぶ」という比喻によって浮かび上がる。女流文学の嚆矢として、明治を生きる女性の悲哀を詩情豊かに描き、夭折した一葉。作家としての「虚」の一葉と一家を支える実生活者の夏。一葉の「物語」を知る者に、虚実合わせた立体的な一葉像がくきやかに見えてくる。

二首目。よく似た他人に出会ってはずとした経験は多くの人にあるだろう。まして思慕する人ならなおのこと心は騒立つ。「藤棚の下に坐りゐる髭鬚の老いびと」は他人であり、また柘二であるという二重構造の描写になっている。

作者と柘二の結びつきや「髭鬚」に晩年の病いの姿をイメージする時、日頃は心の底に折りたたまれている亡き師を追慕する作者の哀しみが、ひそやかな影となって作品に陰影を添えてゆく。

三首目は息子の友だちの少女がテーマ。少女に対する具体的な描写は無く、名前からの印象が少女像を形作っている。一、二首目の既知の人物が「物語」によって重層性を持つとは異なり、虚の人物像が実在の人物を覆う面白さがある。

漢字の表意性や人名の響きを利用して虚の人物像を生み出す技法は、人名の入った短歌のあり方のひとつとして他の歌にも見られる。

家族、友人、知人など読者にとって未知の人物の歌もここに分類できる。歌の描写から人物像を結ぶことができ、例えば「親密さ」などのその人物との関係性も読み取れる。その

一方で人物への理解が及ばず平板に流れてしまう難しさもある。「テーマとしての人名」の作品の特質として、具体的な人物描写が映像となり、歌にはリアリティが生まれる。既知の人名の場合には背景の「物語」が想起されて内容が補完され、厚みのある人物像が現れてくる。

【2】キーワードと結ばれた人名

耳を切りしヴァン・ゴッホを思ひ孤独を思ひ戦争と個人をおもひて眠らず

宮 柘二『山西省』

子に見舞う優しきチョップ ジャイアント

馬場のチョップのスローモーシオン

小塩 卓哉『樹皮』

金雀えにしだ児縦横無尽に吹かれ西行が持ちかへり

ける砂金三万両 塚本 邦雄『不變律』

人物のさまざまな「物語」の中で、特定のイメージが人名と結びついた作品。作者の感性や思想性と呼応した人物やキーワードが選ばれている。そして、心情の代弁や強化するものとして作者自身に引きつけた詠みがなされている。（*傍線は人名とそのキーワード）

一首目は、「ゴッホ」の「耳を切」る行為（＝狂気）と「孤独」に戦争とそれに翻弄される個人の狂気や孤独を見出した作者の憂愁と孤独が読み取れる。

「奔放なタッチと強烈な色彩で苦悩に満ちた魂を表出した」（『マイペディア』）ゴッホ。この作品の背景の耳を切った事件は、同居するゴーギャンに自画像の耳をからかわれた

ことがきつかけだった。ゴッホの抱いた失意や苦悩と、従軍し戦争の現実の直中にある作者。ゴッホの狂気と凄まじい孤独。それが、戦争という巨大なものによって個人の人格や人間性が奪われてゆく狂気と孤独にオーバラップして、読む者に迫ってくる。

二首目は、親子の戯れる姿に「ジャイアント馬場」の得意技のチョップが二重写しになる。スローモーションの優しいチョップという把握に父と子のほのぼのとしたふれ合いが見えてくる。

ジャイアント馬場は、プロレスラーとしてまたタレントとしてお茶の間でおなじみだった。巨大な体格と強面な風貌から零れる笑顔からは、優しく誠実な本質が垣間見えた。最盛期を過ぎてもリングに上がり、決め技の空手チョップは効くのかを疑いたくなるような微妙なスピード。ユーモラスな詠み方の先に親子の情愛に重なってジャイアント馬場への敬愛が感じられる。

三首目は、作者の眼前で金雀児の黄の花が激しい風になうねっている光景。眩しいまでの黄色に砂金三千両の金色の絢爛たるイメージが重なり、時空を超えた幻の風景が出現する。

西行と言えば桜。北面の武士であった生活を捨て出家し、全国を放浪して歌を詠み、後世の芸術家に影響を与えた伝説の歌人。この作品からは西行を知らぬ者には絢爛たる風景が浮かぶ。そして知る者には風景とともに流布する西行像とは違う頑健で精力的な西行像が浮かび上がる。西行は東大寺の砂金勸進を目的に奥州平泉を旅したという。既存のイメージ

が逆利用され一首の内容やイメージの複雑化がはかられたこの作品は、次に紹介する範疇の作品とも考えられる。

結びつきが固定的な歌枕に比べ、人名は、どの人物、どの「物語」の選択かに作者の個性や思想性が現れる。歌に記された語句を手掛かりに表現したい内容の理解はできる。さらに、背景の「物語」の知識があれば、描かれた内容を総体的に捉える深い理解が生まれる。また、詠まれた人物と作者という二人の人物の交錯が作品世界を奥深いものにする。

③イメージとして単独で用いられた人名

希少種の鳥のさえずりアウン・サン・スー

チーという名前の響き 松村由利子『鳥女』

夕闇のシヨウベン・ハウエルそつと来て幼

子のひかる膝を冒せり 小島ゆかり『月光公園』

雨月の夜蜜の暗さとなりにけり野沢凡兆そ

の妻つとむら羽う紅 高野 公彦『雨月』

人名がその人物を描写する文脈から切り離され、「物語」を内包する語として用いられた作品。表面的な内容の裏に人物の「物語」に由来するイメージが暗示され、重層的で複雑な世界が現れる。

一首目。鳥の囀りは、例えば鶯は「法華経」というようにさまざまに聞きなされる。表面的には「アウン・サン・スーチー」を希少種の鳥の声と聞きなす人名の響きに注目した作品と読み取れる。

アウン・サン・スーチーはミャンマーの非暴力民主化運動の象徴的人物。民主化以前の軍事政権下では自宅軟禁など政

府から度重なる弾圧を受けていた。人名の背後の「物語」を想起すると「希少種」や「さえずり」は弾圧に屈せず民主化の声をあげ続けた比喩と読め、社会詠としての鋭い批評性が浮かび上がる。

二首目は、黄昏時の夕闇が徐々に幼子を覆ってゆく光景。「冒す」には「触れる」や「汚す」という意味もある。夕闇が人間の姿を得て幼子に触れる映像が思い浮かぶ。幼子の無垢さや幸福さ（＝光）を冒す不安や苦（＝闇）を暗示する場面として象徴的である。

シヨーベン・ハウエルは、ドイツの哲学者で、インドの仏教思想に通じる厭世主義を説いた人物。この歌の「シヨウベン・ハウエル」は実在の人物でなく、抽象的な観念の喩として擬人化されて用いられている。幼子の人生に差すであろう影。宗教画の象徴性に通じるものをこの作品から感じる。

三首目。「雨月」は雨の夜の満月で、暗闇に実景では見えない幻想の淡い月光がぼんやり浮かぶ。ねっとりとした手触りや体温をもつ「蜜」の闇―官能を刺激する闇―の底に置かれたのは一対の夫婦。「凡兆」と「羽紅」の漢字から浮かぶのはごくありふれた男と美しく魅惑的な妻のイメージ。場面と登場人物、それだけの情報がこの作品では物語を紡ぎ始める不思議さがある。

雨月の夜という設定は、例えば夕暮という昼と夜の間の「たそがれ時」が「逢魔が時」と呼ばれるように神秘性、魔性を孕んだ一人々に独特の心性を生む―非日常の場面設定である。また、三句切れ体言止めの修辭法は、状況と具体の飛

躍的な結びつき生む。これらにより読者の空想は刺激され、幻想の時空で夫婦は動きだすのではないだろうか。

凡兆は医者で、猿蓑の編集にも尽力した蕉門の野沢凡兆であり、羽紅も実在した俳人である。また才人凡兆が罪に問われ表舞台から忽然と姿を消したことを知るとき、登場人物二人の性格が定まる。結末を描かない俳句的手法は余韻を生み、想像を喚起する。読者は二人を主人公にして暗闇の中に空想の物語を描き始める。

音声への転化、観念の擬人化、三句切れ体言止めなどの修辭が人名と呼応して複雑な世界を現出させている。人名は内包するイメージを示すものとして置かれ、作品は現実そのものでなく物語性や象徴性を帯びている。

【まとめ】

人名の入った歌について菱川善夫は「人名が豊富であることと、かつその人名が、歌う人間の知性や教養、思想や芸術観、倫理観と深く結びついていることは、短歌における近代化の直接的なあらわれとみなしてよい。」（『現代短歌ハンドブック』）と述べている。同じ短詩形でも俳句には人名の入った句は少なく、短歌と相性が良いと言える。その反面、名前の喚起力に頼った歌に陥る難しさもある。一首として完結し、さらに人名が響き合うことが重層化の魅力を最大限に引き出すものとなるとわかった。多種多様な人名短歌の一部についての考察なので、今後は現代短歌の中の新たな表現法について注目してゆきたい。